（６） キウイフルーツ

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
1 花腐細菌病 *Pseudomonas syringae* pv. *syringae* *P. marginalis* pv. *marginalis* *P. viridiflava*	1.せん定時に中、短果枝を結果母枝とするように心がける。 2.樹勢を適正に保ち、窒素の遅効きを避ける。 3.園内の通風、採光をよくする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.コサイド3000、Ｚボルドーは発芽期以降は炭酸カルシウム水和剤を加用する。 2.コサイド3000、ドイツボルドーＡ、Ｚボルドー、カスミンボルドー、カッパーシンは新梢長が10cm以下のうちに使用する（散布時期が遅くなると薬害を生じるおそれがある）。 3.カスミン液剤、アグレプト水和剤は出蕾後～開花期に使用する。	休眠期	M1	コサイド３０００
			M1	ドイツボルドーＡ
			M1	Ｚボルドー
			24･M1	（混）カスミンボルドー
			24･M1	（混）カッパーシン水和剤
		3月下旬～4月上旬	25	アグレプト水和剤
			25･41	（混）アグリマイシン－１００
		4月中下旬（蕾出現前まで）	M1	コサイド３０００
			M1	ドイツボルドーＡ
			M1	Ｚボルドー
			24･M1	（混）カスミンボルドー
			24･M1	（混）カッパーシン水和剤
		4月下旬	24	カスミン液剤
			25	アグレプト水和剤
			25･41	（混）アグリマイシン－１００
2 かいよう病 *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae*	1.病原菌が増殖しやすく、樹体内の菌密度が高い状態となる収穫後から発芽期まで及び発芽期から開花期までの防除を徹底する。 2.本病は樹液伝染するので、発生の疑わしい樹のせん定、捻枝、芽かぎ等の作業は最後に行う。 3.せん定バサミやノコギリ等からの感染を防止するため用具のこまめな消毒を行う。 4.接ぎ木でも伝染するので、発生園や発生の疑わしい樹からは穂木等を採取しない。 5.発病圃場から採取した花粉は授粉に使用しない。 6.発病程度に応じて、薬剤防除や枝の切り戻しを行う。主幹部から菌液が噴出するなど発病程度が重い場合は、台木部分まで伐採する。切除した残渣は土中に埋めるなど適切に処分する。 7.防風対策（防風ネット、防風垣等）を行う。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.コサイド3000、ムッシュボルドーＤＦは発芽期以降は炭酸カルシウム水和剤を加用する。 2.コサイド3000、ドイツボルドーＡ、カスミンボルドー、カッパーシン、銅ストマイは新梢長が10cm以下のうちに使用する（散布時期が遅くなると薬害を生じるおそれがある）。 3.マスタピース水和剤の有効成分は生菌なので、開封後はすべて使い切る。予防効果が主体なので、発病前から発病初期に7～10日間隔で散布する。	休眠期	M1	コサイド３０００
			M1	ドイツボルドーＡ
			M1	ムッシュボルドーＤＦ
			M1	ＩＣボルドー６６Ｄ
			24･M1	（混）カスミンボルドー
			24･M1	（混）カッパーシン水和剤
			25･M1	（混）銅ストマイ水和剤
		収穫後～発芽前	M1	ＩＣボルドー６６Ｄ
		収穫後～開花期	M2･M1	（混）園芸ボルドー
		発芽後そう生期	24･M1	（混）カスミンボルドー
			24･M1	（混）カッパーシン水和剤
		4月上旬	24	カスミン液剤
			25･41	（混）アグリマイシン－１００
		生育期	25	アグレプト水和剤
			25	マイシン２０水和剤
			BM2	（生）エコショット
			-(生)	（生）マスタピース水和剤
		収穫後～落葉前（樹幹注入）	24	カスミン液剤
			25	アグレプト液剤
3 灰色かび病 *Botrytis cinerea*	1.園内の通風、採光をよくする。 2.圃場の排水をよくする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.フロンサイドＳＣの注意事項 ・散布後７日以内の入園はしない。 ・ハウスでは使用しない。	開花期～落花期（5月上旬～7月中旬）	2	ロブラール水和剤
			11	ストロビードライフロアブル
			11	ファンタジスタ顆粒水和剤
			29	フロンサイドＳＣ
			11･7	（混）ナリアＷＤＧ
		収穫前（貯蔵病害対策）	2	ロブラール水和剤
			7	パレード15フロアブル
			11	ストロビードライフロアブル
			11	ファンタジスタ顆粒水和剤
			M7	ベルクート水和剤
			10･2	（混）スミブレンド水和剤

キウイフルーツ

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
4 果実軟腐病 *Botryosphaeria dothidea* *Diaporthe* sp. *Lasiodiplodia theobromae*	1.前年の果梗枝、せん定枝及び枯枝を整理し、処分する。 2.樹勢を適正に管理し、園内の通風、採光をよくする。 3.袋かけを行う。 4.15℃以下で追熟すると発生が少ない。 5.粗皮削りを行う。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.多発が予想される場合には、秋雨の前にも防除する。 2.本病対象にトップジンM水和剤、ベンレート水和剤で防除を実施しているところでは、灰色かび病の発生が少ない。 3.フロンサイドＳＣの注意事項は灰色かび病の項を参照。	幼果期～果実肥大期(5月下旬～8月下旬) 収穫前(9月上旬～10月)	1 1 2 29 P7 M5 M7 11･7	トップジンＭ水和剤 ベンレート水和剤 ロブラール水和剤 フロンサイドＳＣ アリエッティ水和剤 ダコニール１０００ ベルクート水和剤 (混)ナリアＷＤＧ
5 白紋羽病 *Rosellinia necatrix*	1.カンキツの白紋羽病に準じる。	苗木の消毒	29	フロンサイドＳＣ
		病樹の治療予防	29	フロンサイドＳＣ
6 切り口及び傷口のゆ合促進		せん定整枝時、病患部削り取り直後及び病枝切除後	1	トップジンＭペースト
7 クワシロカイガラムシ	1.越冬期に多発している枝はせん除する。 2.粗皮削りを行う。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.アプロード水和剤はカイガラムシ類幼虫に登録がある。	2月下旬～発芽前	UN UNM UNM UNM	石灰硫黄合剤 機械油乳剤９５ トモノール トモノールＳ
		4月下旬～5月下旬 7月上旬～中旬 8月下旬～9月下旬	4A 4C 9B 16	モスピラン顆粒水溶剤 トランスフォームフロアブル コルト顆粒水和剤 アプロード水和剤
8 ハマキムシ類	1.摘果によって、果実の接触をできるだけ防ぐ。	発生初期	11A 11A 11A 11A 11A 11A 11A 28 28	トアロー水和剤ＣＴ ゼンターリ顆粒水和剤 デルフィン顆粒水和剤 エスマルクＤＦ クオークフロアブル ファイブスター顆粒水和剤 チューンアップ顆粒水和剤 フェニックス顆粒水和剤 フェニックスフロアブル
9 ケムシ類	1.せん定時に卵がついている枝を切り取る。	発生初期	22B 28	アクセルフロアブル フェニックスフロアブル
10 キイロマイコガ	1.６月上旬頃に袋かけを行う。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.本虫対象にアディオン乳剤、スカウトフロアブルで防除を実施しているところでは、キウイヒメヨコバイの発生が少ない。 2.ピレスロイド系剤(RACコード3A)の注意事項 ・蚕毒が特に強いので注意する。 ・散布後、ハダニ類が増えることがあるので注意する。	6月上旬～6月下旬 8月中旬～9月上旬	3A 3A 3A 14 28	アディオン乳剤 アグロスリン乳剤 スカウトフロアブル パダンＳＧ水溶剤 フェニックスフロアブル

キウイフルーツ

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除		
		防除時期	RACコード	薬剤
11 コウモリガ	1.株元の雑草を防ぎ、敷ワラ等も幹から離して行う。 2.梅雨期～盛夏期に幼虫を刺殺する。			
12 コガネムシ類	1.有機質肥料を多用すると、多発生することがある。	6月上旬 ～7月上旬	13	コテツフロアブル
13 カメムシ類	1.幼果期頃より加害されるので、早期に袋かけ等を行う。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.果実への寄生が認められる場合は、直ちに薬剤散布を行う。 2.成虫は山林原野から夕方に飛来し、夜間加害するので、防除は夕方に一斉に行う。 3.周辺にスギ、ヒノキ等の多い園や、過去に被害の認められた園では特に注意する。 4.ピレスロイド系剤(RACコード3A)の注意事項 ・蚕毒が特に強いので注意する。 ・散布後、ハダニ類が増えることがあるので注意する。	発生期 (6月上旬～ 10月中旬)	3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A	アディオン乳剤 アグロスリン乳剤 テルスターフロアブル アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 ダントツ水溶剤 アドマイヤーフロアブル
14 キウイヒメヨコバイ	1.発生地からの苗木の持ち込みや採穂はしない。 2.枝の芽基部等に産み付けられた卵を除去する。 3.ピレスロイド系剤(RACコード3A)の注意事項 ・蚕毒が特に強いので注意する。 ・散布後、ハダニ類が増えることがあるので注意する。	5月上旬～ 9月下旬	3A 4A 4A 13 14 21A	アグロスリン乳剤 モスピラン顆粒水溶剤 モスピランSL液剤 コテツフロアブル パダンSG水溶剤 サンマイト水和剤
15 土壌線虫	1.寄生を受けた苗を本圃に持ち込まない。 2.汚染場所から線虫類を持ち込まないように注意する。 3.堆肥や有機物を施用し、補食性線虫や捕捉菌の密度を高めるとともに、樹勢を維持する。			